杉山旗水、湯島の白梅｜長谷川錦舟。当日は新宿歌舞伎町商店連合会理事長藤森作次郎先生を来賓に迎えて琵琶談義の外同先生のため特に杉山旗水氏が物語琵琶「高瀬舟」を演奏、小宴後七時半散会した。尚若宮旭登、日原錦楼、若林杏雨、関口脩声の四氏は病気又は事故のため欠席された。

女流さつき会　七月二十一日昼大阪天第十一回演奏会　神筋朝陽会館。月下の陣｜田中英月、五条橋｜飯塚様水、小栗栖｜藤原英水、白虎隊｜伊勢谷安江、本能寺｜岡部錦蝶、菅公｜山田。桜田、吉野山懐古｜菊地小楠公の母｜山崎、城山｜中山嬢水、川中島｜蓑老駿水、井伊大老｜小西甫水、戦艦大和｜松岡玲水、雪晴れ｜杭東詠水、木村重成｜中山鳳水、桐一葉｜小川吟水、西郷隆盛｜前田絹水、曲垣平九郎｜阿部勝水、畠山重忠｜京都平井春嶺、湖水乗切｜横須賀斉藤姝水、竜の口｜名古屋福島漂水、新撰組｜大阪東憲水。外に詩舞、吟詠各一番。

祇園祭協賛　日本三大祭の随一京都祇園奉納演奏会　祭は七月十五日の山鉾二十数基の巡行に始まって二十八日の御輿洗いで終る厳粛盛大な神事であるが、あとの祭りが二十三日取行われ当日は十数年来の恒例となっている京都琵琶協会協賛の奉納琵琶演奏会が開催され本年も梅雨明けの同日四時半から八坂神社能楽堂で左記の通り献奏した。開会に先立ち本殿内宮に全員参列神前に額づいて宮司の修抜を受け本殿、拝殿、能楽堂、楼門等の境内建物に吊された満艦色無数の飾り提灯は薄暮迫る頃から一斉に点灯されて昼を欺くばかりの神々しさを呈し演奏会場前にしつらえた天幕張の腰掛十数脚に坐り切れない多数の聴衆はその周囲に立ちつくして各流派琵琶を熱心に鑑賞していた。

八時半全献奏を終り神社から頂いた神酒で乾盃して滞りなく本年の行事を終ったが折から入浴中の横須賀斉藤姝水女史も一曲を奉納して神霊を慰め錦上華を添えられた。

敦盛塚｜細川ちか、西郷隆盛｜一坊寺旭清堅田落｜岡本旭村、秋風故郷の山｜国友旭香五絃弾｜旭濤会、大楠公｜田中鵬水、新撰組｜植村寞水、戦艦大和｜矢吹旭美津、元寇｜平井春嶺、安宅の関｜梅原旭濤、本能寺｜斉藤姝水、加藤清正｜古谷竟水、那須与一｜戸田旭公。（安住旭康、木村維水両氏病気欠）。

日本琵琶振興会　七月二十八日一時｜八月例親睦研究会　時東京新宿洲鳳会館。来る九月十五日開催の大会に就て協議、又新琵琶器第六号が完成し当日披露された。尚八月の例会は休会。

京都琵琶協会　三十四度という猛暑を八月定例茶話会　克服して八月四日（日）午後一時から戸田、田中、梅原、矢吹、安住、牧、古谷、木村、水内、平井、植村の各会員が平井春嶺氏宅に集って開催。①去る七月二十三日祇園祭奉納演奏会の収支決算報告②八月二十三日から四泊五日の北海道琵琶親善旅行の具体的予定案③協会秋季演奏会の協議などの外二、三会員の研究演奏があって夕食を共にし七時半散会。

琵琶　ラヂオ放送　①七月二十五日午後五時NHK・MF邦楽オ｜デション　HK。で平野鉦水氏「川中島」。八月八日同時刻山崎旭萃女史「大楠公」須田誠舟氏「城山」放送」。

予告

○…京都琵琶協会九月定例茶話会　九月一日（日）昼一時会員矢吹旭美津女史宅。十一月十七日開催の協会秋季演奏会の出演順抽籤と各自演奏曲目を当日決定のため全員万障繰合せ出席のこと。欠席の場合は当日午前中に矢吹女史へ連絡されたし。

○…錦心流一水会城東支部演奏会　九月十二日（木）昼一時東京上野本牧亭

○…鈴木流泉演奏会　九月十五日（日）正午東京日本橋三越前第一証券ホール。

○…藤巻旭鴻演奏会　九月十五日（日）昼東京千代田区農協ホール。

○…浅野晴風秋の大会　九月二十九日（日）一時｜八時東京中野区文化センター。

あとがき

八月十六日夜のお盆の送り火「大文字」は京の名物であるがこの大文字で京の夏は終ることになっている。●然し実際には地蔵盆が過ぎる頃迄の残暑は仲々厳しい。●今年は秋が早いと気象庁でも予言しているから本紙がお手許に届く時分には大分凌ぎよくなっていよう。●暑さに弱い筆者などは秋の訪づれが文字通り一日千秋の思いでそれまでは好きな琵琶器を膝に置く気にもなれない。●明治大正生れの多い琵琶人各位、夏の疲れが出ませんよう御自愛を。

昭和四十九年九月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（八五）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第二四三号　京絃社

我が道を行く六十五年（一九）

西郷天風

その医院は銀座竹川町（今の銀座七、八丁目）の店からかなり遠方にあたるが、松屋の顧問医と云うので他の店員なみに、はるばる通うしかなかった。それもこの松屋に就職して既に五ケ月にもなるが未だ給料について何の話もなく、私も別に気にもかけていなかったし酒も煙草も嗜まず、友人達との交遊も中断したまゝの住込で日常生活の総てが先方任せの気安さに何等不自由も感ぜず、坐る事に馴れるまでが唯一の悩みであった。それが医院に通うようになって初めて小使銭の必要にせまられた訳だが、それも毎週五円程の前借で充分だった。只不安なのは三日目毎の不在中、帳場の事務一切を他の番頭達に任せっきりのことであった。そこで帳場専用の伝票を使用することにしたが、やがて大福帳も簿記に改めることを考へ、一番々頭を通して大旦那の意向を打診した結果。

是程の店ともなれば当然簿記に改めたいと以前から考へない訳ではなかったが、お帳場さんの他に簿記係を置くとなると中々容易ではない。併し今のお帳場さんが簿記を心得ており、旧態依然たる大福帳を簿記に改めたいと云うのなら、それこそ願ってもない幸なことで異存などあるどころか大賛成、とのことで一切を委任されたのであった。

そこで早速この店独自の簿記、つまり此店では売れた品を〝都〟預けて来た品を〝泊〟返された物は〝戻〟などの項目を設けた普通より大判の頁を必要とするので其原稿作製に取かゝった。いつも坐ったまゝ手持ち無沙汰勝のお帳場が、急に洋罫紙を机一杯にひろげ毛筆をペンに持替えて罫棒をころがし乍ら赤や青インクを以て罫引を初めた。

この突然の事態に番頭達は眼を見張り、仔細を知った二番々頭の口井は真向から反対を表明し、やがて若旦那から直接時期尚早を理由に中止を申し渡された、そのうえ番頭達の知る筈のない洋式の帳簿に改めるとは、何か腹黒い魂胆でもあるやに噂する者もあった。

更に驚いたことは、此店には大旦那派と若旦那派の二派があり、二番々頭の口井は若旦那の妹婿の立場から何かと権勢を張り、一番々頭の吉田は若旦那より十数年も前から此店に居る古参者として大旦那の信認も厚く、若旦那には小舅格の有力者であった。

かって若旦那は婿入当時、妹を一番々頭に嫁がせようとしたが吉田は之を受けなかった、若旦那はその不遜を快よしとせず、肯て二番番頭を選んだことから派閥を生じたのだった。

この松屋では毎年の棚卸しの市を、足袋の産地で知られた行田町で開くのが永年の例で、一番々頭の吉田は小僧の時から大旦那と共に行田に行き、若旦那の妹の素性をいやと云う程知りぬいていたことが、この縁談を拒む原因となったと云う、亦大旦那の関係で就職した私は当然一番々頭派であり、従って吉田が私の為に何くれとなく親身の世話を惜まなかったのも合点のゆく次第であった。

余談はさておき、この松屋では年度末決算が四月に行われ、前述のような状態のさ中に収支計算も終り、月末の給料日に私は初めて奥座敷に呼ばれて給料と賞与を受取り、約半年ぶりで就職が確定した訳で、月給は五十円賞与が六ケ月分と云う新参者にはかなりの優遇であり、前借分は帳消しとのことだった。だが私は既に退職を決意し時期を窺っていた。肋間神経痛もさることながら、店内の空気にいや気がさしたからであった。

かくしてその年の夏が終る頃私は松屋を去

ったが松屋では退職を認めず、爾后一ケ年の間私の私物を渡して呉れなかった。

惟うに、当初から五番々頭として迎えたことも、給料や賞与等の優遇も総て山田老との関係を考慮しての事であったろう、尤も私の身の廻り品を受取りに行った時、お帳場はまだ見付からぬらしかった。

私はこの松屋に居る間に二人の友を得た、一人は東京憲兵隊長夫人の弟、荒井京二、他の一人は店の得意先新橋金春通りの新叶家の息子高野保長で、いづれも私より二才ばかり年少者だが、琵琶や画の展覧会にはいつも同行する関係で八咫家がその待合せの場所だった、或日、その八咫家の主人から意外なことを申込まれた、大民洋服店兼営の東林鉱山営業所へ入社せよと頻りにすゝめるのである。

やがて、大民主人の要望で琵琶教授所設置を条件として東林鉱山の嘱託を引受けることとなった。というと如何にも高飛車に出たかにみえるが、実は社員として続けられる自信がもてなかったのであった。

大民の主人山岸為吉氏は、私の為に銀座通りの東裡、東豊多摩河岸の流れを背にした二階家を借受け、其処に薩摩琵琶教授の看板をかゝげ、これで私は元の琵琶師に戻ってしまったが、今度は以前と違って安住の喜びがあった。

斯様に大民が私の為に力を入れて呉れるには、それなりの重大な理由があったからであった。

琵琶吟詠大会

とき　昭和49年9月15日（日）正午より

ところ　第一証券ホール（東京日本橋三越前）

主催　鈴木流泉

後援　日本琵琶振興会

二代吉水錦翁

小田原国尊先生を偲ぶ（一）

東京　坂本錦道

昭和四十九年四月四日は二代吉水錦翁＝小田原国尊先生の歿せられた日である。この世に生を亨けて八十五年三か月、齢には不足はないとすれど一代の名弾奏家を失ったことは日本琵琶界の一大損失である。先生の人生行路の一面を見ると、曾って内務省造神宮使庁の一官吏とし、戦後は明治神宮の主事として平凡なサラリーマンでもあったが、その半面に於て、一生を通じて薩摩琵琶弾奏者として之を見るならば、まさに慨世憂国の志士としてその骨頂は古武士を彷彿させるものがあり、演奏される曲目の中に躍如としてキャラクターが露呈されている。

思えば明治、大正の薩摩琵琶の勃興期に当り、幼少の頃より斯道の研讃に心魂を傾倒されて来た先生は、大正九年一介の無名弾奏者小田原国安として、当時の正絃会より突如颯爽としてスタートを切ったのである。年令は三十才の若輩であった。正派の歌唱方式の旧踏を打破するため、その頃仏門より出でてミッションを卒業した異端児西田岳仙先生と手を取り合って、正派的オリジナリテイの歌唱方式の新風を捲き起し、精力的演奏活動とまた一面執筆活動も展開。小田原先生は何れかと云えば豪壮な崩れもの、西田先生は嫋々たる情もので、両者の演奏は驚異的の存在となった。その頃のブームより推して充分専門的職業として成り立つ時代に、両師共に生活の資は別に之を求め、敢えてプロに堕する事を避けられていたようであるが、明治大正昭和の三代に亘る琵琶界の周辺を顧みながら、小田原先生は如何に生き抜かれて来たかを振返って見よう。

二代吉水錦翁＝小田原国尊（本名国安）先生は、明治二十三年二月二十二日鹿児島県川辺郡加世田に武家の子として生れる。明治四十四年鹿児島学校中学部卒業。中学を出たのは二十二才の時であり、小学校より年代を繰ってみると二、三年のブランクがあるが、これは中学一年の時陸軍幼年学校に入学したが或る事情で中途退学し、再び同中学に復校されたためである。そして卒業と同時に鹿児島専売局支所に奉職された。

琵琶に関する修業は、何せ琵琶と云えば夜も日も明けぬ土地柄と、武士の子は幼年時代より一通り琵琶を習う事がお定りの国でもあり、年寄りの弾士より士風ものを教わり、又友人や先輩と教えっこをして可なりの技を身につけられ、少年期より屢々公開の席で演奏もするようになっていられた。

さて鹿児島専売局に勤務して一年程たつうちに、台南庁鳳山街塩務支館より至急職員派遣の要請があり、奇しくも小田原青年がその選に当った。内地の月給が九円と云う時代で、外地に出ればその四倍の三十六円というのだから月給もさる事ながら、日頃愛唱する「台湾入」を一つ実地に台湾に渡り、勤務をしながら故宮の御遺跡を偲ぶことも国安青年を刺激し、雄志勃々として赴任した。そして四年間を外地で過ごされたが、薩摩琵琶に対する鬱勃たる研究慾はこれ以上国安青年を外地に安閑として、平凡な一サラリーマンとして留まるを許さざるものがあった。

大正五年十月（二十七才）遂に退職して帰国し、これより本格的の琵琶修業に欣注する。勿論中学時代も学業と琵琶の修業時代であるが、ある時鹿児島に於て琵琶の大会が催された折、当時一流の弾奏家飯牟礼寿長師がその会でトリ演奏される予定を変更して、新進気鋭の小田原国安青年をトリに据えて一曲を弾奏させた。俄然怒濤のような万雷の拍手、今で云うアンコールの拍手鳴り止まず、再度国安青年は琵琶を持って聴衆と相対したと云う爆発的人気を沸騰せしめた。

この大会が終って、主催者の鹿児島琵琶界の長老（氏名失念）より小田原青年に対し「君のような天才的弾奏者は滅多に出るものでないが、然し現状に甘んじてはいけない、君の歌唱力は別として技法を卒直に云うなれば、その技は皆拾い集めで首尾に一貫性がない、将来伸びるためには正統的技法を学ばなくてはいけない、幸い私の友人に児島天南師がいるから紹介してあげる、初歩から研究を仕直したら天下一品のものとなる。」と懇々と説得され、茲に国安青年は発憤の動機となって天南師に入門することになった。この時いま一人の青年貴島亥三（後の紘の名手）と共に軌道の修正を成し遂げられた。（これは私が先生より聞いた直話）

狂酔亭漫録（第百三）

大坂落城異聞（三）

古谷竟水

淀君が秀吉の側室になった動機については古来種々憶測されているが、両者間に恋愛的意識が働いたとは到底想像出来ない。

秀吉としては、自己の持つ権力を利用して只好色的に相手を圧倒した位の事ではなく、之には深い理由があったのだ。秀吉の若年の頃からの瞼の女性は主君信長の妹お市の方であったが、之は身分違いばかりではなく猿面異相の風采もこの佳人には適わしくない所謂及ばぬ恋であった。

併し浅井長政が信長によって亡ぼされ彼女が未亡人となって戻った際には秀吉も大いに心火を燃やしたが、事は首尾よく運ばずライバル柴田勝家にせしめられ無念やる方もない折も折、主命とは云い乍ら勝家を北の荘に攻略する運命となり、お市の方は再婚して漸く十ケ月足らずで夫に殉じて自刃したのである。秀吉にして見れば旧友勝家は兎に角、戦国の慣いとは云い乍ら永年想い焦れたお市の方は哀れでもあり惜しくもあり寝醒めの悪い事であったので、せめて此の瞼の人の面影を残すその長女の淀君をでも手に入れて長年に亘り恋い焦がれた想いの幾分の一をでも充たし度いと云うのが、娘分として養育した淀君を側室に直した相当根深い理由であった。

反面淀君にして見れば、秀吉は彼女の最も嫌いなタイプの男であり、最初は織田家の家来で而も身分の低い足軽の出であり、彼は母の再婚した勝家を攻め滅ぼしたのみならず、母の最初の夫長政を攻略した際にも参加した憎むべき親の仇敵であったが、自分が北の荘から逃れ出てから豊臣家の厄介者だった今日戦国の常とは云い乍ら現在の庇護者であり、又旭日昇天の勢ある秀吉の許に入れば我身の

安泰と幸福は目前にあり、而も将来相当権力の座に就く事も保証される限り彼の懐に飛込む事は、積る旧怨と天秤に掛けても得策と勘案して側室関係を結んだ事と想像される。

秀吉の没後に至っては、淀君の態度は完全に独裁者の坐に昇り一応天下の政権を手中に収めたので百僚百官は彼女の膝下に跪坐するに到ったが、而も三十歳の女盛りの事とて自由奔放に振舞わざるを得ず、遂に古今に絶する乱行に溺れ、譜代の臣下は離反して之が豊家の天下を覆す大原因に成ったのであるが、此の件は後に詳記する予定である。

本稿記述の順序として、大阪城の沿革について概要を史書により摘記すると、

大阪城。別名南面山不落城。摂津国大阪市にある旧城址。外郭は北方淀河に沿い、西は東横堀を以て外堀に充て高麗橋を以て正門となし、南は道頓堀以東玉造の北に及び空堀を控へ、周囲凡そ三里、規模雄大で堅牢を以て鳴り、本邦無双と称せられる。その城もと本願寺石山別院のあった処で、実に明応五年兼寿蓮如の創めたものである。ついで光教證如の此の地を以て本山とし、城構としたるに始まる。子光佐顕如のとき織田信長と戦いて、天正八年信長と和し、城を致して退くや、信長収めて番衆を置いて守らしむ。のち豊臣秀吉の志を得るや、天正十一年関西諸国の大小名に命じて城を築かしめ、十三年に至って成る。これ実に今日残れる大阪城であって、本丸、二ノ丸、三ノ丸の三つに分れ、本丸を繞って二ノ丸があり、二ノ丸の西部にある一郭を西ノ丸という。三ノ丸は二ノ丸を囲繞す。慶長十九年冬秀吉の子秀頼この城に拠って徳川家康と戦い、幾何もなくして和議成りその外郭を壊ち総構を埋め、ただ牙城のみとなった。翌元和元年五月秀頼再び兵を挙げたけれども利あらず、城遂に陥り、豊臣氏滅ぶ。家康よってこれを松平忠明に与え、忠明命を受けて修治し、やや旧観に復した。五年七月幕府忠明を大和郡山に移し、大阪を直轄地となした。ここに於て伏見城を存し置く必要が無くなったから、その年伏見城を廃し、番衆を大阪に移し、ときに伏見城番内藤信正を大阪城代に任じ、これより大阪城の職制大いに整うに至った。六年正月秀忠、伊勢越中以西の諸侯に命じて大に修築の工を起し、家光のとき寛永元年及び五年の再度これを継ぎ、前後三回十年の久しきに亘って工を竣えた。家綱の時萬治三年雷火によって城内焼け、家治の時天明三年また雷震があって、大手門等が焼けた。よって家慶の天保十四年修造を加え、十一年を経て安政五年殿館及び大手門を再建したが、天守の矢倉は遂に再建の機会を得なかった。慶応元年将軍家茂、長州征伐の師を起すや、大阪城を以て行営となし、翌二年七月師半にして病んで城中に薨じた。明治に至り元年正月城内火を発し殿館等焼け、五年大阪鎮台を城内に設け、ついで第四師団の兵営となし、以て今日に至ったのであるが、昭和六年大阪市は工を起して、旧規により天主閣を設け略々旧観に復するを得た。とある。

右の文中、徳川十四代将軍家茂が大阪城中にて病死したとあるが、年表によると慶応二年七月二十日、家茂二十一歳の時の事で私の青年の頃大阪の古老から聞いた話によると、家茂は或時大阪城の櫓に登り市内を眺ゆて居た折、丁度目の前の堀の水に、六尺以上もある大山椒魚の腐爛した死骸が浮き上り、之を見た家茂は急に慄然悪寒を覚えて発熱し、それが原因で死去したというので、之は徳川氏に亡ぼされた豊臣一族の亡霊が仮りに山椒魚の姿で現われ、徳川将軍を呪い殺したものだと大阪付近の住民は噂したと伝えられる。

当初の大阪城の規模は周囲三里の巨大な城で、冬の陣講和の際大分縮小され、現今は本丸跡とその周辺のみが残存する次第である。現に大阪の南区には八丁目筋、天王寺区には空堀の地名が残っているが、之等は夫々元の大阪城に関係ある地名の由である。

現在の大阪城の天主閣は、今上陛下御即位奉祝記念の為大阪市が寄附金により再建を計画し、社会党等の反対を押切って昭和六年竣工したものであるが、再建の参考資料は何も無く、唯礎石たる天守台があるのみで、建築形式等は全然判明せず、僅かに旧彦根藩主井伊家に伝来の難波戦記の絵屏風に天主閣らしき画あり、之を参考に設計して鉄骨コンクリート造に建てたものであるが、戦前まで残っていた名古屋城や現在の姫路城の荘重で威厳に充ちた感じには、聊か及ばなく感ずるのは私一人ではあるまい。

（続く）

湖岸の白峯彦根城

辻　旭城

琵琶歌に登場する彦根市の東、佐和山に石田三成の佐和山城跡、彦根駅の西約一キロに彦根城などがある。記者は彦根城取材のため陽春の日曜日、カメラを肩に大阪駅から米原行の快速電車に乗りこんだ。

彦根駅で下車して駅前通りに出ると、観光客を迎える大きなネオン塔が建てられており、曽ってお城で栄えて来たこの城下町は、今も観光客の落とす金でつゝましく生活をしている。シャレたこの大通りも一歩横道にそれると、そこゝに昔ながらの古めかしい家や白壁の土蔵が今尚並び、わらぶきの家なども時たま見受けられる。

目ざす彦根城は、道巾の狭い駅前の通りを真直ぐ西に突当ったところに聳えていて、その麓に護国神社がある。今日は大安吉日か、式を終えたばかりの新郎新婦が記念撮影に余念無さそう。記者も若い頃の在りし日を思い浮かべながら、幸せそうなカップルを祝福しつつ外堀に架かった橋を渡ると、右手に二階建の櫓が見えて来た、開国記念館である。

櫓から鶯嬢がマイクで「皆さま、この開国記念館は井伊大老を偲んで建てられたもので、中には大老の遺品が沢山展示されております。観光の皆様お気軽におはいり下さいませ。」宣伝が板についているので入口をはいると、まづ大老を讃えた説明板が目につく。「大老は人一倍皇室を尊敬したお方で、幕府は朝廷から一切を任された責任上、政府であるとの信念を持っていたと云うことだ。記者が小学校で歴史の時間に、大老が勤皇の志士達を虐殺した悪玉の張本人のように教わったのは、こゝでは通用しないようである！。

陳列品の内、木製台の上に大砲の設計図や、長さ三米もある遠目鏡に興味を引かれた、直径僅か十センチ余りのこの遠目鏡は、附近の草むらや木の間にひそむ忍術使いの曲者を発見するのに使った、と説明書にあった。

内堀に架けられた表門橋を渡り、事務所の横から続く石段を上りつめると、道は右に左に折れ曲っている。これは敵が城へ攻め上って来ても、上からの狙い撃ちで全滅させる苦心の築城法である。

彦根城は周囲四キロ、湖水に臨み豪を三重にめぐらしている。家康の部下で、その勇将ぶりから徳川四天王の一人と云われた直政の子井伊直勝は、関ケ原戦で武功抜群を認められてこの地を賜り、慶長八年（一六〇三）築城に着工し、二十年の長年月を以て完成した。それから三百年の間井伊家の居城として彦根の街に君臨したが、幕府は倒れ廃藩置県の明治から大正、そして昭和の今ではこの城が琵琶湖新八景の一つ「月明の彦根城」として観光客の人気を呼んでいる。

残暑御見舞

錦びわ
桜会本部
〒176 東京都練馬区旭町三ノ二二ノ四
電話（九三〇）四四九八番

古谷竟水
〒617 向日市寺戸町二枚田四番地
電話〇七五（九二一）九八九四番

木村維水
〒621 亀岡市千代川町今津
電話〇七七一二（三）〇五六四番

牧南水
〒604 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一
電話（八四一）二八九八番

城中には国宝や重要文化財など数多く蔵されている。本丸の天主閣は白亜三層の堂々たるもので、もと大津城の天守を移したと云われ、下の石垣は〝ごぼう積み〟という特殊の建築法によるもの。太鼓を打って時を知らせた重文太鼓楼門は城中で最も古い建物であり、同じく重文天秤楼門は秀吉が築いた長浜城から移され、西丸三重櫓は浅井長政の小谷城から移建した重文指定である。その他の国宝、重文など枚挙に遑ない。

また、ミニチュアとは云いながらデラックスなお雛道具、総てに精巧な総蒔絵の鏡台やお歯黒セットから手拭掛、さては風呂桶に至るまで当時の女の子の〝七ツ道具〟が揃っている。ミンクのコートやワニ皮のハンドバッグなどの無かった時代のこと、「あら、あのお歯黒セット、チョイトいかすじゃない？」なんて云っていたかも知れぬ。

再び天主閣に戻って見直していると、団体客を案内して来たガイドさんの声「皆さま、この天主閣の石垣はゴボウ積みと云って、石の大きい面を内側に、小さい面を外に出して積重ねられたもので、丁度木棉の着物のように、見かけは悪くても実は仲々丈夫なものでございまーす……。」流石に観光バスのガイドさん、板についた説明振りであった。

残暑御見舞

京絃社

祝 京絃創刊 二十周年（四）

佐藤晃絃

創刊二十周年を迎えられ誠にお目出とうと双手を挙げて御祝意を表します。一口に二十年と云っても雨の日風の日健康の事もあり並大抵の御努力ではなかった事と心から敬意を表する次第、その間毎回有益な多くの記事が京絃に寄せられた事は偏えに貴殿の御人徳の然らしむる処と存じます。二十才と申せば昔なら徴兵検査を受け押しも押されもせぬ社界人の一員としての地位を獲得されたのでありつ特に今後の御発展を期待するものであります。幸い御自愛の程お祈りして御祝の言葉といたします。

……貴誌京絃二十周年の御祝詞を未だ申し述べませず失礼しておりました。毎月々々の発行、編集の御苦労に敬意を表します、加えて琵琶演奏の面にも多大の御努力を払われているのですから感じ入りました。今後共御健康に呉れ〴〵も御留意の上斯界季報の詳細並に啓蒙活動等の多分野に亘る権威ある京絃の名声を益々高められます様期待して居ります。

水藤五郎

桜と琵琶歌

吉井良三

琵琶を聴き始めて約二年、各地の演奏会で楽しく一日を過ごさせて頂いて居ますが「京絃」創刊二十周年に当り御祝詞を申上げ併せて全然素人の私がこの機会に日ごろ感じた二、三について書かせて頂きます。

この二年間に京阪神と、一度だけ岐阜まで足を伸ばして約二十の演奏会で諸先生の熱演を聴かせて貰いましたが、琵琶に流派があってそれぞれの歴史を持ち、各自特異な語りが技を競って居られるのが漸くわかりかけて来ました。

当時私も処生方針に就て世の仕組の復雑さに幾度か絶望し、辛さわびしさ、馬鹿らしさを飲酒にまぎらせて居ました。その時機にたまたま神戸で聴いた琵琶の曲は、忘れていたものを思い出させ琵琶の低音のその旋律は聴者全員に咳払い一つさせず、亦四絃の撥音は何とも云えぬ古武士のどよめきを思わせ、演者の語りに引込まれて此の世の事とも思えず、石童丸の千年の昔から百年前の明治までの演奏に、その時代々々に我身を置いた様に世俗の憂いはどこかへ飛び去り時間の経つのを忘れさせましたが、その後各会場を廻る内いつも来聴者の少ないのに気がつき、座席が全部埋まるのは二十会場の内四、五個所、中には三分の一ぐらいの時もありました。

是等の点に就て此機会に、素人考えですが頂目別に二、三思いついた事を記して見ます。

(1) 入場有料制度

(2) 現代の世上の出来事の作詞作曲

(3) 野外演奏会

(1) 無料演奏会は会の権威が無くなり一般の常識として無料の会は聴きに行っても大した事はないと考える人が多いのではないか、税金等の点がどうなるのか知りませんが最低の入場料を取っては如何ですか、どうしても入場料を、と云えない人には無料券を贈る。

(2) 琵琶の語りは殆ど過去の出来事で現在或は未来の理念が出て来ない、最近新聞やTVで報道される例えば(A)京都で起った母子別々の心中事件＝僅か十歳の小学生が母が服毒自殺した為遺書を残して病院の五階から飛び降りあと追い自殺をした。(B)花を欺く妙齢美女の修道院への逃避。(C)中核派、角マル派等の過激学生の行動。(D)揺れ動く社界の流れに反駁しながら心の寄り所を探して右往左往する現代人。(E)小野田少尉の三十年戦争等々。このような現代の色々の社界問題の追求を骨子にした琵琶歌は出来ないものでしょうか。

(3) 茶道の事は私はよくわかりませんが、幔幕を引いて野立てを楽しむ状景、或は琴の合奏で咬々たる満月と薄明るい池の面を強く弱く妙音が走るのは得もいわれぬ光景です。琵琶も春は桜花の下、亦皐月の花をバックに、秋は紅葉の嵐山などで野外演奏会の開催。

以上全く斯界の事が解らぬ私の一人よがりの言とは思いますが、琵琶を聴くことの楽しさを人一倍感じている私としては人後に落ちないつもりです。何とかして大勢の同好者と共に楽しみたい一心に外なりません。

一週間で散る花を惜しんで今年も何万の人が逝く春に短夜の歓を尽しました。昔陸軍歩兵の散華を飾る歌に「散兵線の花と散れ」の一節がありましたが、之は偶々園芸品種に作られた〝染井吉野〟なる桜の一種の出現に同調した。時の権威の国策遂行の一手段で桜花には何等意図はなく、寧ろ数日で散り果てる「花の命を惜しめ」と永い様で短い人間の運命を物語ったものと思われます。此花見人口の何割かを琵琶の為に割かせる努力をし、人の世の幸せの最大公約数は何であるか、を求めている大多数の渇きにうるおいを与える事、それが同好者の喜びではないでしょうか。

亦構成する年令層も若い人許りを対照にせず人口分類の上からも逆ピラミットで年配者の割合が増えています。良い先生の演奏ならば長時間でも満足すると思います。

× × ×

（本稿は五月に頂いたのですが紙面の都合で掲載がおくれました。お詫致します。）

佐藤哲

京絃二十周年、ほんとに御苦労様でございました。日本芸能顕彰会から重ね〴〵の栄誉の勲章を贈られたのは先生の功蹟に対する当然の事と存じます、誠にお目出たい次第で今後も琵琶文化の向上と琵琶楽発展のため御活躍をお祈りいたします……。

螢祭り協賛

琵琶演奏会　六月九日夜八時貝塚市の水間寺で境内三重塔から千数百匹の螢が放たれて光彩を放ったが大阪琵琶同好会は之に協賛して隅田川＝辻旭城、関ケ原＝石橋旭嶺、井伊大老＝寺尾旭吉栄各氏の琵琶や詩吟の演奏をして多数の観衆を喜ばせた。

大鳥神社蒐蒲祭

琵琶献奏　六月十九日同神社で左記の通り献奏。伽羅の兜＝辻旭城、平野国臣＝石橋旭嶺、斉藤実盛＝光旭仙、安宅の関＝大村旭令。外に舞踊、詩吟等。

第十七回愛媛邦楽合同演奏会

七日松山市民会館大ホールで開催され能楽、清元、舞踊、浄曲、長唄三曲、常盤津の諸芸に伍して筑前琵琶「合奏戦艦大和」＝白井旭優・石塚旭奏、薩摩琵琶「西郷隆盛」＝佐藤晃絃の二曲を上演、前日来の雨も当日は晴れ上り二千の聴衆に多大の感銘を与えた。

高嶋哮水氏活躍

七月十四日明石市岸上師社中のゆかた会に「恩響の彼方へ」ゲスト出演、同十六日明石信用金庫大ホールに於ける明石婦人サロン十四周年の集いに「恩響の彼方へ」を演奏して好評を受けた。明石婦人サロンは同市二十四小学校学区の智識層婦人の集りで当日は県知事、市長らも出席され盛会であった。

日本芸術琵琶柏会

七月例会　七月二十一日昼東京お江戸日本橋・門琵琶・故吉水錦翁師追悼の詩＝山崎錦幽、松の廊下＝山本隆水、新曲衣川＝青木晴城、茨木＝石田脩水、会津の華＝